

2 石阪堅壯（肝吸虫発見者）

の著述について

中山 沃

石阪堅壯（二八一四—一八九九）は京都で蘭方を学び、江戸時代備前・備中で蘭方医として活躍し、明治初期、倉敷で開業、一方地方医師達の病理解剖活動の中心人物として終始し、そして日本における肝吸虫の最初の発見者として不朽の名を留めている。また本草学や歴史にも造詣が深かった。堅壯が直接執筆した著書は少なく、多くは堅壯が口授したものを弟子らが筆録し、堅壯が校閲、出版されている。自著、未刊本、その他関係した出版物などについて報告する（注、堅壯は終始「石坂」姓を用い、「石坂」は用いていない。しかし養子惟寛は多く「石坂」を用いている）。

一、空洞石阪先生口授、男逸筆記『西洋算籌用法略解』、刊行年は印刷されていないが、養子逸蔵（惟寛、二十歳）

の『例言』が安政六年（二八五九）である。西洋算法の加減乗除法の概略を教えたもので、例言 十二ページ・本文三十ページの小型本（縦六七・横一五七ミリ）である。

二、空洞先生閱、山田寛輯『内服同功初編』刊行年は印刷されていないが、堅壯の序文は安政四年（一八五七）、緒方洪庵の序文は安政六年初冬（十月）である。足守藩医山田寛（貞順）は洪庵と堅壯の門人で、嘉永三年正月の洪庵の足守除痘館の種痘活動に参加している。

三、空洞石阪先生閱、杉生鼎輯『内服同功二編』、万延元年（一八六〇）刊行、安政六年晩秋下浣（九月下旬）の堅壯の序文がある。杉生鼎（方策、揮齋）は堅壯の弟子で、備中幕府旗本蒔田氏の侍医杉生革斎の養子である。

以上二書は『江戸科学古典叢書』として復刻され、一部宗田一氏が解説している。内科的疾患は内服薬を服用して治療するだけでなく、外用方法を用いるべきであるという堅壯の考えに基づき、堅壯塾で用いられた方法、薰腸法・灌腸法・エレキテル法・ガルハニスミウム法ほか多数の治療法が記され、師塾で作製使用した聴管（聴診器）・圧絡帯・静電気発生装置・抜歯器などの図が載せら

れている。

四、石阪堅壮口授、神崎有隣筆記『博物新編記聞』上中下三冊、明治七年刊行。序文は養子陸軍二等軍医正石阪惟寛が同年十一月広島鎮台で記している。堅壮の弟子神崎有隣が英国宣教医ホプソンの著書『博物新編』を読んで、疑問の所を堅壮に質問し、解説してもらったことを筆録したもので、これを社友が謄写の労を省くために出版を勧め、堅壮もこれを許したものである。物理・化学・動植物・天文の広い分野にわたっている。

五、石阪堅壮輯『児島備州補伝』上下二冊、明治十三年刊行、堅壮は備前藩主池田茂政の命を児島高德の事跡の調査を行い、慶応四年『児島誌』を著した。これはその増補本である。

六、救荒小品、未刊、堅壮自筆本(杏雨書屋蔵)、『例言』から明治十八年に脱稿したと考えられる。倉敷県知事伊勢氏華から食料となる植物の図を描き県庁に寄付することを勧められたが、廃県のため中止となった。筑前の人河野禎蔵が『農業花暦』(明治三年刊)の校閲を堅壮に依頼した時、堅壮の図をこの本に載せる承諾をえ、掲載した。

しかし十数種であったので、さらに増補を企図したのである。雀麦・野稗など七十余種の植物を掲げ、救荒時の調査法も記してある。

七、空洞遺稿、明治三十二年十二月刊、著作者石坂堅壮で、同年十月二十六日八十七歳で死去後、残されていた文、詩、和歌を惟寛が肖像、描いた風景画を添えて出版したものである。前記『内服同功初編』の巻末に、石坂氏蔵梓として、石坂貞吉遺稿、義弟秋朗(堅壮)校訂『貌律面苦人身窮理書』、石坂秋朗著『蘭算塵劫記』一卷、同著『薬性備要』写真図四卷、空洞先生口授山田寛筆記『和蘭病名彙解』二卷が記されているが、筆者未見である。なお弘文社社主として明治十一年発刊した博物、歴史雑誌『好事雑報』についても紹介する。